

『神が望んでおられること』 (要旨)

聖書箇所：I テサロニケ 5:16-22

【1】神が望んでおられること

使徒パウロは、テサロニケ教会のメンバーに「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい」(5:16-18)と勧めました。しかし、「いつも…絶えず…すべてのこと…」がこの勧めのハードルを高くしているように思われてなりません。嬉しいことであれば喜び、手に負えないことを前に祈り、良かったことを感謝する。そうであれば実行可能かもしれないと安心できます。なぜパウロは「いつも…絶えず…すべてのことにおいて」と述べたのでしょうか。

【2】いつも喜んでいなさい

まずパウロの言う「喜び」に着目します。人は、好ましい出来事に満足してうれしく思うことを「喜び」だと考えます(明鏡国語辞典)。しかしパウロが手紙を送ったテサロニケ教会は、苦難のただ中に置かれ、辛い経験をしていました(1:6)。またパウロ自身不安で居ても立っても居られない時や(3:15)、挫折を経験して「弱く、恐れおののく」(I コリント 1:2)もありました。そうした好ましくない状況では「喜ぶ」ことが難しく思われます。しかしパウロは、苦難の中にいる仲間にも「喜びなさい」言います。これはテサロニケ教会に限ったことではありません。

「いつも主にあつて喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」(ピリピ 4:4)

パウロは全てのキリスト者に、外的な環境のいかに関わらず「喜びなさい」と勧めました。それはこの「喜び」が好ましい出来事によらず、「主にあつて」のものだからです。聖書学者G. フィーは、パウロが言う「喜び」を「喜びの気持ちではなく、神の御前で喜びを表明することを熟考の上選択すること」(Gordon Fee)だと説明します。自分を取り巻く環境では、とても喜びの気持ちが湧いてこない。しかし自分の歩みに目を留めて下さる神様に信頼して喜ぶことを選ぶ。それが、「主にあつて喜ぶ」ということではないでしょうか。

パウロは「多くの苦難の中で、聖霊による喜び

をもって…」(1:6)と、苦難と喜びが共存するテサロニケ教会の姿を見ていました。その喜びは人為的に作り出すものではなく、聖霊なる神様の賜物の一部なのです。(参照:ガラテヤ 5:22)

【3】絶えず祈りなさい

次に、パウロは絶えず祈るようにと勧めました。私たちは祈る時に、目を閉じて手を合わせ「天の父なる神様…」と唇を動かします。「祈り」がそうした型を文字通り実行するものであるとすれば、「絶えず祈る」ことができる人はいません。

ライトフットは、祈りの本質を以下のように記します。「祈りの本質を構成するものは、くちびるの動きにではなく、神へと向かう心の高まりにある」(J.B. ライトフット)

祈りの言葉を何時間唱えるかではなく、神様に生かされていることを受け入れることが、祈りの出発点なのでしょう。神様にあつて物事を見つめ、人と関わる時に、思いがけず祈りの言葉を発していることもあるでしょう。たとえば、パウロがテサロニケ教会に宛てた手紙は、彼の心の内にある祈りが幾度も言葉となって紡ぎ出されていました(参照: 1:2-3, 3:11, 5:23)。

【4】すべてのことにおいて感謝しなさい

最後にパウロは、好ましいことだけでなく、すべてのことにおいて感謝するよう勧めました。

聖書は苦難を、神の愛と義の懲らしめ、訓練と教えます(新聖書辞典)。人は、苦難を好ましい出来事とは到底思えません。しかし、苦難は忍耐を生み、忍耐は試練によって磨かれた品性を生み、その品性は希望を生み出すと聖書は教えるのです(参照:ロマ 5:3-5)。その渦中にある時に苦難の意味を理解できなかつたとしてもです(ロマ 8:28)。

私たちは、自分の立っている地平から目の前の出来事を評価します。しかし神様を信じる時、人の理解を超えたことも含め、すべて神様に委ねるようにと、ご聖霊の促しを受けます。

